

失われた幼年期

— H. Vaughan と W. Wordsworth —

宮 地 信 弘

The Theme of Infancy in Vaughan's *The Retreat* and Wordsworth's *Immortality Ode*

Nobuhiro MIYACHI

序

まず次の二つの詩の一節を比較することから始めよう。いずれも至福につつまれていた幼年時代の喪失をモチーフとする部分である。

- (1) There was a time when meadow, grove, and stream,
The earth, and every common sight,
 To me did seem
 Apparelled in celestial light,
The glory and the freshness of a dream.
It is not now as it hath been of yore;—
 Turn wheresoe'er I may,
 By night or day,
The things which I have seen I now can see no more.¹⁾

- (2) I cannot reach it; and my striving eye
Dazles at it, as at eternity.
 Were now that Chronicle alive,
Those white designs which children drive,
And the thoughts of each harmless hour,
With their content too in my pow'r,
Quickly would I make my path even,
And by meer playing go to Heaven.²⁾

(1)の方では、過ぎ去った無垢なる時代と現在との間に絶対的な〈内的距離〉が強く意識されていて、全体に沈鬱な、半ば絶望に近い悲嘆が重く響いてくるのに対して、(2)の方では、同じ楽園喪失をうたってはいても、喪失感が憧憬の力に転換されており、その中に宗教的感情が読みとれる。そうした違いはあるが、「失われた幼年期」という点ではいずれも共通のモチーフを扱っている。(1)の方は、言うまでもなく、イギリス・ロマン派を代表する W. Wordsworth の、一般には『不滅の頌歌』(*Immortality Ode*, 1803 (?1802)–1806) と呼ばれる詩³⁾の冒頭の一連で

ある。(2)の方は Wordsworth よりも150年ほど前のいわゆる形而上派詩人の最後を飾る一人 Henry Vaughan (1621/2-1695) の宗教詩集『火花散らす火打ち石』(*Silex Scintillans*, 1650-1655) におさめられた「子供の頃」(“*Childe-hood*”)と題する詩の冒頭である。一見したところ、Vaughan の詩の上記引用部分にはモチーフの点だけでなく、語句においても Wordsworth の先取りと思える箇所が二、三見られる。たとえば、「子供たちを駆りたてるあの純白の計画」(*Those white designs which children drive*) や「穢れを知らぬ時間」(*each harmless hour*) などの表現は Wordsworth の詩の中にあらわれてもおかしくはない「ワーズワース的」語句である。もし(2)には、Wordsworth が得意とする自然描写が欠けていると指摘されるのであれば、これもよく引かれる次の箇所をあげるができる。

Fair, shining *Mountains* of my pilgrimage,
And flow'ry *Vales*, whose flow'rs were stars:
The *days* and *nights* of my first, happy age;
An age without distast and wars:⁴⁾ (“Looking-back” ll. 1-4.)

この引用で注目に値するのは、幸福だった過去への追想部分 (*An age without distast and wars*) のみならず、それが山に向けられた親近感 (*Fair, shining Mountains*) と結びついていることであろう。すなわち、当時、山は決して快い喜びを与えるものではなく、いまわしい嫌悪と恐怖の対象でしかなかったのに対し、Vaughan は山に対して全体として親近感、ないしは〈快〉の感情を抱いていたらしく思える点である。Wordsworth に限らず、ロマン派の詩人たちが (*Blake* を例外として) 一度はアルプスの山の崇高美に心惹かれたことはよく知られている。この点でも Vaughan と Wordsworth はよく似た詩人であるという印象を受ける。

この17世紀中葉の神秘主義的宗教詩人は、普通、形而上派詩人たちの一人に考えられるが、自然へ深い関心を示した点が他の形而上派詩人たちには見られない彼の特質としてよく指摘される。その点で、彼は Wordsworth の先駆をなすと見なされ、両者の精神的親近性がしばしば問題にされる。特に影響関係が云々されるのは Vaughan の、これも幸福な幼い日々への切なる回帰願望をうたった「後退」(“*The Retreat*”)と題する詩と、先に冒頭の一連を引いた Wordsworth の *Immortality Ode* との間においてである。

Vaughan の “*The Retreat*” が Wordsworth の *Immortality Ode* の直接的靈感源であったかどうかはともかく、この二つの詩の類似性に注目するあまり、19世紀には、Wordsworth は “*The Retreat*” がおさめられている Vaughan の宗教詩集 *Silex Scintillans* を一部を所有していて、精読していたのではないかという神話まで生まれた。ところが、おもしろいことに、これが単なる好事家的興味がつくりだしたロマンティックな神話に終わらず、事実 Wordsworth の蔵書の中に Vaughan の詩集があったことが立証されてしまった。これで *Immortality Ode* が Vaughan の “*The Retreat*” の影響のもとに書かれたことが決定的になったかに見えたが、現在では、直接影響説は否定されるか疑問視されることが多い。その理由の一つは、もし Wordsworth が、あれだけ自分の思想に近い Vaughan の詩を読んだのなら、何らかの感想なり注釈なりが、たとえ断片的であれ、残っていてもよさそうなのに、Wordsworth の著作全体の中で Vaughan への言及が皆無であること、それからもう一つの理由は、Wordsworth が *Immortality Ode* の中で展開しているプラトンの靈魂不滅論や〈先在〉説 (*Pre-existence*)、あるいは〈想起〉説 (*Reminiscence*) の直接の出典は、必ずしも Vaughan にではなく、友人の Coleridge に

負っているらしいことが指摘されうることである⁵⁾。しかし、直接影響説を否定する何よりも有力な根拠は作品の内部に求められうる。この小論では、問題の“The Retreate”と *Immortality Ode* を特に詩人の姿勢という側面から比較分析していき、それぞれの詩人にとって、幼年期とはいかなる意味を持つものであったかを考えていきたいと思う。

1

“The Retreate”は、Vaughanの詩の中で最も有名なものの一つで、完成度の高い作品である。全行32行の比較的短い詩で、前段の幸福な幼年期の喪失を歌う部分と、再びその幼年期に「後退」したいと切望する後段部分に分けられる。全詩を引く。

The Retreate.

Happy those early days! when I
 Shin'd in my Angell-infancy.
 Before I understood this place
 Appointed for my second race,
 Or taught my soul to fancy ought
 But a white, Celestiall thought,
 When yet I had not walkt above
 A mile, or two, from my first love,
 And looking back (at that short space,)
 Could see a glimpse of his bright-face;
 When on some *gilded Cloud*, or *floure*
 My gazing soul would dwell an houre,
 And in those weaker glories spy
 Some shadows of eternity;
 Before I taught my tongue to wound
 My Conscience with a sinfull sound,
 Or had the black art to dispence
 A sev'rall sinne to ev'ry sence,
 But felt through all this fleshly dresse
 Bright *shootes* of everlastingnesse.
 O how I long to travell back
 And tread again that ancient track!
 That I might once more reach that plaine,
 Where first I left my glorious traine,
 From whence th'Inlightned spirit sees
 That shady City of Palme trees;
 But (ah!) my soul with too much stay
 Is drunk, and staggers in the way.
 Some men a forward motion love,
 But I by backward steps would move,
 And when this dust falls to the urn
 In that state I came return.⁶⁾

Vaughanは、「あの幼き日々の幸福よ」(Happy those early days!)と歌いだし、以下接続詞や関係詞を連続的に用いて幼年期の至福から離れていった過程を詳細に述べていき、それによって「天使の幼さ」(Angell-infancy)に浴していた頃を思い描く。*Immortality Ode*においても、

Wordsworth は幼年期喪失の悲しみを歌うことから始めるが、両者の違いはまずその悲哀の感情の響きの差にあらわれる。〈序〉に引いた *Immortality Ode* の一連目は、外界のすべてが「天上の光に包まれて」(apparelled in celestial light) いた幼年期の幸福を回想する最初の 5 行が、続く 4 行の現在の喪失感をうたう部分でしめくくられているが、それに続く 3 連もほぼ同様の構成になっており、各連ごとに喪失の悲しみが繰り返して表出される。

Waters on a starry night
Are beautiful and fair;
The sunshine is a glorious birth;
But yet I know, where'er I go,
That there hath past away a glory from the earth. (ll. 14-18)

Now, while the birds thus sing a joyous song,
And while the young lambs bound
As to the tabor's sound,
To me alone there came a thought of grief: (ll. 19-22)

Whither is fled the visionary gleam?
Where is it now, the glory and the dream? (ll. 56-57)

つまり、ここには詩の論理的発展はないのであって、悲しみの感情の堂々めぐりがあるだけなのである。このむきだしにされた感情表出の執拗な繰り返しは、詩人が失われた過去の樂園から完全に絶たれた思いと、外界の自然からの深い疎外感を痛切に意識していることを示すものである。Vaughan の詩にはこれほど絶対的な〈内的距離〉は読みとれない。

Immortality Ode は、実は、執筆年代が二つに分かれており、以上の 4 連目までが 1803 年(あるいは 1802 年)に書かれ、残りの部分は 3 年後の 1806 年に書かれている。1803 年に書かれた最初の 4 連は以上のように、喪失感の表出に終始しており、幼年期に関するプラトニズム的な解釈等の思弁的・哲学的要素が現われるのは 1806 年に付加された 5 連目からである。

Our birth is but a sleep and a forgetting:
The Soul that rises with us, our life's Star,
Hath had elsewhere its setting,
And cometh from afar:
Not in entire forgetfulness,
And not in utter nakedness,
But trailing clouds of glory do we come
From God, who is our home: (ll. 58-65)

人間が現世に生まれるということは、魂がそれまで目ざめていた状態から眠りにつくことであり、霊的世界を忘れることであるとするこの部分が、プラトンの〈先在〉説(Pre-existence)(霊魂は肉体の誕生以前には霊的世界にあり、誕生とともにその前世の記憶を失うという説)に由来することは明白であろう。しかし、この詩におけるこの思想の直接の給供源はプラトンではなく、友人 Coleridge が長男誕生の際に書いたソネット(“Sonnet composed on a Journey Homeward; the Author having received Intelligence of the Birth of a son”, 1797)であつたらしい。

Oft o'er my brain does that strange fancy roll

Which makes the present (while the flash doth last)
Seem a mere semblance of some unknown past,
Mixed with such feelings, as perplex the soul
Self-questioned in her sleep; and some have said
We liv'd, ere yet this robe of flesh we wore.⁷⁾

さて、ここで問題にしたいのは、プラトニズムの思想の出所ではなく、この思想が *Immortality Ode* の中でいかに取り扱われているか、どれくらい詩の中の思想として溶け込んでいるかということである。この部分 (ll. 58-60) に関する限り、このプラトニズムの思想はあまりにも生硬な印象を与える。もともと Wordsworth という詩人は過去の具体的な体験を書きつらねることを得意とし、哲学的思弁や抽象化ということには不得手なというか、気質的に向かない詩人なのであるが、それでも、この部分からはいかにもとってつけたというような感じをうける。後半に展開される Wordsworth 自身の苦悩から生み落とされた倫理的な思想に比べると、借り物の思想という感じを拭えない。つまり詩の中に十分溶け込んでいないのである。その一つの証左が65行目の “God” という語の使用に見い出せると思う。

この語はこの詩の中ではここだけにしか現れないし、また詩の主張の展開も人生から哲学的精神を学ぶという方向に向かい、キリスト教的な主題はあらわれない。つまり、この “God” という語の意味内容はさわめて不明瞭なのである。Wordsworth が自己の体験を通して、自然の中に生々しく感じとった超自然的な生命や神秘的な存在を言い表わす場合、“a presence” や “being” といった語を用いるのが彼の常である。たとえば、次の詩 (*Tintern Abbey Lines*, 1798) の “A presence” がその好例である。

And I have felt
A *presence* that disturbs me with the joy
Of elevated thoughts; a sense sublime
Of something far more deeply interfused,
Whose dwelling is the light of setting suns,
And the round ocean and the living air,
And the blue sky, and in the mind of man:⁸⁾

(*Tintern Abbey Lines* ll. 93-99 イタリックは筆者)

この詩では、彼は言葉をかえてそうした存在の実体を伝えようと試みるが、正統キリスト教の神 “God” に還元することはない。あくまでも自らのアニミズム的感覚や動物的感覚を守り抜き、それらを伝える言葉をさがそうと努める。

A *motion* and a *spirit*, that impels
All thinking things, all objects of all thought,
And rolls through all things.

(*Tintern Abbey Lines* ll. 100-102 イタリックは筆者)

上記二つの引用文のイタリックの部分において、それぞれに不定冠詞が付されていることにも注意する必要がある。この不定冠詞を付した言い方は奇妙に具体的で、生々しい感じを与え、Wordsworth のアニミズム的感覚をよく伝えてくれる。つまり Wordsworth にとって、そうした「存在」や「動き」や「霊」は決して抽象概念ではなく、不可解ではあるが、実体を備えた

何か生命的なもの（ヌーメニク生命）なのである。Wordsworth と自然の未知なる生命との一体感をうかがわせる以上のような語に比べると、“God” という語に充填された感情の稀薄さが逆に浮かび上がってくると思う。このことは、言いかえれば、Wordsworth がこのプラトニズムの思想にコミットすることなく、未消化のまま借り入れてしまったことを暴露するものではないだろうか。確かにプラトンの〈先在〉説は自らの経験をうまく説明してくれはするが、どこことなく異質的なものをそこに感じとっていたことを示すものではないだろうか。この説が Wordsworth の、幼年期からの疎外感をいやす信念になりえなかったのもそうしたあたりに原因が求められるだろう。

ところで、Vaughan の “The Retreat” の中で *Immortality Ode* の 5 連目と比較される箇所は、3 行目から 4 行目の「天使の幼なさに包まれて輝いていた子供の頃、私はまだこの世が私の第二の旅路に定められた場所であるとは知らずにいた」という couplet の部分であろう。この箇所の思想的起源をたどれば、Wordsworth の *Immortality Ode* 同様、プラトンの〈先在〉説 (Pre-existence) にまで遡行できるだろうが、Vaughan がプラトンに頼っていたかどうかは不明である。むしろ、ここでの直接の思想的背景はプロティノスを起源とするルネサンス期の Neo-Platonism の〈流出〉(emanation) の原理であると思われる⁹⁾。つまり、万物は根源的な〈一者〉(the One) から溢れ出て、その〈一者〉(the One) から遠ざかるにつれて、次第に霊性・完全性を失っていくとする思想である。Vaughan に最も強い思想的影響を与えたのは、双生児の弟で、17 世紀イギリスを代表する有名なヘルメス哲学者である Thomas Vaughan であったことはよく知られている。L. C. Martin によれば、Thomas Vaughan の思想の中には、ネオ・プラトニズムからユダヤ教思想、ヘルメス哲学からカバラ思想、西洋神智学から東洋の魔術まで、さまざまな起源を持つ思想が流れ込んでいたらしい¹⁰⁾。その影響のせいか、あるいは当時の時代思想によるものか、Vaughan の詩にはネオ・プラトニズムの思想とキリスト教思想が分かちがたく結合している作品が多い。“The Retreat” のこの部分についても、Vaughan は〈流出〉(emanation) の原理やプラトンの〈先在〉説をキリスト教思想と結合させた形でとらえているらしく思われる。もともとプラトンの〈先在〉説は、「……幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう。」(「マタイ伝」18 章 3 節) というような聖書の箇所を媒介にして、容易にキリスト教思想の中に取り込まれる性格のものであった¹¹⁾。何よりも Vaughan 自身、2 行目の “Angell-infancy” という語句で、幼年期をキリスト教の天使のイメージと結びつけていることがそのことを雄弁に物語っている¹²⁾。それに、この詩に限らず、Vaughan の詩に支配的なイメージの出所は、聖書と、彼が師と仰いだ George Herbert の宗教詩であり、感情の主調音は、幾分神秘主義的傾向を含んだ宗教感情なのであって、哲学的思想ではない。

Vaughan の詩で、キリスト教思想に由来するもう一つの神秘主義的傾向のイメージとして、7 行目から 10 行目(「私はまだ最初の愛から 1 マイルか 2 マイルしか離れておらず、ふり返ると、神の輝く顔を仰ぎ見ることができた」)の部分における「至福直観」(beatific vision) のイメージをあげることができる。これは聖書の「わたしたちは今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかし、その時には、顔と顔を合わせて見るであろう。」(「コリント人への第一の手紙」13 章 12 節) という箇所に典拠を持つ、直接に神を見るという宗教的生の終局の目的を述べた思想であり、これはまた神を見るだけでなく、神に見られるという双方の霊的視線の直接的交感より生ずる神秘的法悦境をあらわしたものでもある。Vaughan がこの思想に根ざ

す神の〈眼差し〉(glance)に深い関心を寄せていたことは次のような箇所からも明らかである。

Yet since as easie 'tis for thee
To make man good, as bid him be,
And with one glaunce (could he that gain,)
To look him out of all his pain,¹³⁾ ("Misery", ll. 93-96)

O thy bright looks ! thy glance of love
Shown, & but shown me from above!
Rare look! that can dispense such joy
As without wooing wins the coy.
And makes him mourn, and pine and dye
Like a starv'd Eaglet, for thine eye.¹⁴⁾ ("The Favour", ll. 1-6)

苦悩を癒し、魂を救う力を秘めた神の眼差し、それに包まれることが Vaughan の願いの一つでもあった。“full-ey'd love” (“Cock-crowing” l. 41) (豊饒な眼差しに横溢する愛) という美しい表現は Vaughan の「至福直観」の眼に対する神秘主義的傾向を示すものであろう。

聖書に由来する箇所は他にもある。23行目から26行目にかけて、詩人がもし「かつての道」(ancient track)を逆にたどって、幼い頃にもどることができたら、初めて輝かしい天使たちと別れた平原、神の光に照らされた魂が「緑の陰濃き棕櫚の都」(shady City of Palm trees)を眺望できるあの平原へ再び帰れるであろうと夢想する箇所である。ここの出典は旧約聖書の「申命記」34章1節から4節である。これは「申命記」の最終章で、神がモーゼに、彼が死ぬ前に、ピスガの頂きから「しゅろの町エリコ」を含む「約束の地」を見せる場面である。したがって、26行目の「緑の陰濃き棕櫚の都」とは具体的にはエリコの町のことをさすのであるが、この詩の中では天の都すなわち神の国、あるいは神そのものを意味しており、また23行の「あの平原」(that plaine)とはまさに「天使の如き幼年時代」あるいは現世的時間を越えた「永遠」(eternity)という状態を意味している。このように聖書的風景を一種の宗教的 vision に高めていくことは Vaughan の得意とするところである。

Vaughan はしばしば自然詩人と呼ばれるが、彼の詩に現れる自然ないし風景は、そのほとんどすべてが Vaughan 自身の眼で観察してとらえた自然・風景ではなく、古典文学に出てくるいわゆる「理想的風景」(locus amoenus)であったり、聖書に由来する vision としての風景であったりすることが多い。その点からすれば、Vaughan を、Wordsworth を自然詩人と呼ぶのと同じ意味で自然詩人と呼ぶことは適切ではない。Wordsworth の場合、具体的な自然をきわめて感覚的なレベルで具体的に体験したということが大切なのである。たとえ彼にとって最終的に意味があるのは内面の風景へと変質した風景、いいかえれば精神化された風景——あるいは簡単に風景の記憶といってもいいが——ではあっても、具体的な自然との霊的交感という個人的経験なくしては、それもありえないことは疑いえないからである。

さて、もう一度 “The Retreat” の前段部を別の面から考えてみたい。ある批評家はこのわずか20行の部分に「天地創造から黙示録に至る時間の巨大な円環」を読み込んでいるが¹⁵⁾、なるほど詳しく見れば、この部分は完全な神の光につつまれていた時代の個人的記憶というよりも、人間が神の恩寵を失っていく過程の記録、いわばミルトンの『失樂園』(Paradise Lost) の超縮約版として読めることがわかる。すなわち、行を追うごとに「天使の幼なさ」の光から離れていき、次第に罪深い存在に堕ちていく過程、墮落の生涯が寓意(allegory)としてまとめら

れているのである。私は少し視点をかえて、この墮落の過程の寓意化が当時の宗教詩人たちに大きな影響を与えた瞑想の技術 (art of meditation) に則してなされているらしいことに注目したい。

瞑想の技術とは、16世紀中葉、イエズス会の創始者であり、腐敗したカトリック教会の「自己肅正運動」の原動力となったイグナチウス・ロヨラ (St. Ignatius) がその著作『靈操』 (*Spiritual Exercises*) の中でまとめた実践的な宗教的瞑想の方法で、当時のヨーロッパに広まり、深く浸透していた。また、17世紀英国の形而上派詩人たちの宗教詩にも少なからぬ影響を与えたことは L. L. Martz 教授の研究によって知られている¹⁶⁾。具体的な瞑想の方法は、まず視覚的想像力 (所謂「想像力の眼」 (the eye of imagination)) を用いて、たとえば地獄の劫火や天国の栄光と至福等の具体的場面を思い描く。その「現場の設定」 (compositio loci) といわれる準備段階を経て、実際の瞑想に入り、自己の罪深さや神の無限の恩寵などを再認識して神との「対話」 (colloquy) に至り、新しい決意や神への感謝の祈りで終わるというものである。瞑想の内容は大きく二つに分けられ、一つはキリストの生涯 (受肉・受難・復活・昇天) についての瞑想であり、もう一つは罪と地獄についてである。いわば、一種の信仰心活性化の便法なのである。この瞑想の方法の特徴的なところは具体的場面の設定、すなわち視覚的イメージの喚起が中心になっている点にある。したがって、そのつくられたイメージがそのまま詩のイメージに変化していく可能性がそこにあり、言い換えれば、瞑想の技術はそのまま詩の技法と直結しているのである。

“The Retreat” を書いた頃の Vaughan が16世紀以来の瞑想の伝統に深く浸っていたことは、宗教詩集 *Silex Scintillans* の第一部 (“The Retreat” は第一部にある) が1650年に出版されてから2年後に祈りと瞑想に関する散文『オリーブ山』 (*The Mount of Olives*) を書いていることから想像できる。したがって、Vaughan が宗教詩を書いた時、瞑想的な生活になじんでいたことは十分考えられる。事実、Vaughan の宗教詩には聖書の記事を素材とし、それをもとに「想像力の眼」で具体的場面をつくりあげていると思われる詩が多い。つまり「現場の設定」といわれる瞑想の技術にのっとった詩作法だと指摘できるのである。

キリストの生涯を思い描くにせよ、墮地獄の恐怖を瞑想するにせよ、いずれも瞑想は瞑想者自身に現在の状態を意識させずにはおかない。そこから、当然「自己分析」 (self-analysis) あるいは「自己吟味」 (self-scrutiny) という瞑想のカテゴリーが派生してくる。しかしその場合でも、目的はあくまでも自己の魂を浄め、自己の内部に「神の姿」を見いだし、「自己への不信」から「神への信頼」へ至ることにある。

さて、Vaughan の “The Retreat” の場合、各々のカプレットで描かれる墮落の過程は自己吟味の瞑想の結果生まれたものと見てよいのではないかと思う。しかもそれは単なる詩人個人の自己吟味に終わらず、一種の vision として人類全体の墮罪の歴史の要約にもなっているのである。そして詩人の最終的な姿勢は、後段の部分で表現されているように、神のもとへ回帰することに向いている。それはまさに J. D. Simmonds の言う「巡礼者」¹⁷⁾ (pilgrim) の姿であり、この神に向かう「巡礼者」的姿勢こそが、Vaughan の宗教詩のすべてを特徴づける根本の姿勢なのである。したがって、幼年期喪失の悲しみが Vaughan を、Wordsworth のように、執拗に悩まし続けることはなく、それは神に向けた視線によって乗り越えられていくのである。

2

では、*Ode* における Wordsworth の姿勢とはどういうものであろうか。一言でいえば、人類全体の不幸に対して向けられた道徳的姿勢とでもいうことができよう。

Wordsworth は、時には感覚の圧制に苦しむほど鋭敏な感覚——「動物的感覚」——に恵まれた少年であったが、同時に非常にまじめで、強い道徳的感覚を持った少年でもあったことが彼の精神的自叙伝である『序曲』(*The Prelude*, 1805, 1850) の中のいくつかのエピソードから読みとれる。たとえば Book I に出てくる、夜の孤独な彷徨の途中で他人のしかけた罠にかかった鳥を盗んだ時のエピソード。

Sometimes it befel
In these night-wanderings, that a strong desire
O'erpower'd my better reason, and the bird
Which was the captive of another's toils
Became my prey; and, when the deed was done
I heard among the solitary hills
Low breathings coming after me, and sounds
Of undistinguishable motion, steps
Almost as silent as the turf they trod.¹⁸⁾

(BK I. ll. 324-332)

盗みを働いた少年 Wordsworth の後を音もなく追いかけてくる「低い息づかい」(low breathings) とは、罪を犯した自分を罰する、少年の超自我 (superego) の象徴、あるいは同じことだが、道徳的良心の象徴であることは疑いないだろう。少年 Wordsworth はそのような経験を通して、ちょうど「自然」に育てられる Lucy (“Three years she grew in sun and shower,”) のように、教師としての自然から道徳的な人格を形成されるのである。

ところで、*Ode* は、いかにして過ぎ去った幼年期との絶対的な距離をうめて、その喪失の悲しみと外界からの疎外感を克服するかを模索している詩でもある。言いかえれば、幼年期の栄光を失った人生を生きるに値するものと認識させる新しい道徳哲学を探求する詩でもあるのである。幼年期の至福喪失の主題は、途中で幼児礼讃を含みながら8連まで続く。

Thou, whose exterior semblance doth belie
Thy Soul's immensity;
Thou best Philosopher, who yet dost keep
Thy heritage, thou Eye among the blind,
That, deaf and silent, read'st the eternal deep,
Haunted for ever by the eternal mind,—
Mighty Prophet! Seer blest!
On whom those truths do rest,
Which we are toiling all our lives to find,
In darkness lost, the darkness of the grave;
Thou, over whom thy Immortality
Broods like the Day, a Master o'er a Slave,
A Presence which is not to be put by;

(ll. 109-121)

Why with such earnest pains dost thou provoke
The years to bring the inevitable yoke,

Thus blindly with thy blessedness at strife?
Full soon thy Soul shall have her earthly freight,
And custom lie upon thee with a weight,
Heavy as frost, and deep almost as life!

(ll. 124-129)

前半で幼児の特性、「叡智」「預言者」「不滅性」等を列挙して礼讃しながらも、その魂の上に現世の「日常的習慣」(custom) が重くのしかかっていく運命を詩人は悲しく認めざるをえない。

詩が克服の主題に一転するのは9連目からであるが、詩人は積極的な克服の道は発見しえないで、残された何がしかの靈性に慰めを見い出すことしかできない。

O joy! that in our embers
Is something that doth live,
That nature yet remembers
What was so fugitive!
The thought of our past years in me doth breed
Perpetual benediction:

(ll. 130-135)

詩人が「永遠の祝福」(perpetual benediction)を感じるのは、地上的生を送るうちにはるか遠くに隔てられはしたが、一瞬のうちに「不滅の海」(immortal sea) へとつれもどしてくれる「おぼろげな(前生の)記憶」(shadowy recollections) に対してである。

for those first affections,
Those shadowy recollections,
Which, be they what they may,
Are yet the fountain light of our day,
Are yet a master light of all our seeing;
Uphold us, cherish, and have power to make
Our noisy years seem moments in the being
Of the eternal Silence:

(ll. 149-156)

だが、結局、Wordsworth は、過去にもどるすべを見つけえず、また Vaughan のように神秘主義的な vision にジャンプすることもできず、深い悲しみを込めて、人間の苦しみに対する倫理的共感、死を通して生を見つめる宗教的信仰(ただし、必ずしもキリスト教の信仰と同一視することはできない)、歳月とともに円熟していく哲学的精神といった道徳的生に新たな生き方を求めていく以外にないことを知る。

What though the radiance which was once so bright
Be now for ever taken from my sight,
Though nothing can bring back the hour
Of splendour in the grass, of glory in the flower;
We will grieve not, rather find
Strength in what remains behind;
In the primal sympathy
Which having been must ever be;
In the soothing thoughts that spring
Out of human suffering;

In the faith that looks through death,
In years that bring the philosophic mind.

(ll. 176-187)

ここに見られるのは、しかし、積極的な姿勢ではなく、また悟りでもない。解決策を見い出せない時の諦念である。その諦念が、人間全体の不幸な運命に向けられた道徳的な眼差し¹⁹⁾を生みだしている。成長と共に幼年期から疎外されていった自分の悲しい現実を、人間一般に共通の避けられない悲しい宿命としてとらえようとする視点の誕生。Wordsworth のもう一つの代表的な詩 *Tintern Abbey Lines* の次の箇所も同様の道徳的姿勢を示している。

For I have learned
To look on nature, not as in the hour
Of thoughtless youth; but hearing oftentimes
The still, sad music of humanity,
Nor harsh nor grating, though of ample power
To chasten and subdue.

(ll. 88-93)

しかし、たとえ個人の悲しみを通して「人間の静かな、悲しい調べ」(the still, sad music of humanity) を聞きえたとしても、それは慰めにはなっても救いにはならない。幼年期の回復もできないし、過去との内的距離のもとたす悲しみを乗り越える満足すべき手段も見つからないまま、ただ諦観するしかない出口なしの状況、それが Wordsworth の置かれている状況なのである。*Ode* という詩のたゆたうような、あるいは堂々めぐりをするような構成やリズム、唐突な終わり方等はそうした Wordsworth の存在状況を反映する言語的「身振り」と言えるだろう。Vaughan の“The Retreat”には諦観はない。揺るぎないキリスト教信仰を持つ Vaughan には、希望はあっても諦念は無縁なのである。Vaughan の幼年期の至福の vision 喪失は神に向かう信仰によって、あるいは神の啓示によって回復されうる性質のものなのである。たとえば次の詩の冒頭の、宇宙的とさえ言える vision の衝撃力はそのことを確信させるに足るものである。

I saw Eternity the other night
Like a great *Ring* of pure and endless light,
All calm, as it was bright,
And round beneath it, Time in hours, days, years
Driv'n by the spheres
Like a vast shadow mov'd, In which the world
And all her train were hurl'd;²⁰⁾

(“The World” ll. 1-7)

Wordsworth には、Vaughan のネオ・プラトニズムのキリスト教や神秘主義に相当するような、頼るべき外なる体系がなかった。それほどまでに自己の感覚というものを信頼し、それによって生きてきたという点がおそらく Wordsworth の後年の不幸をうんでおり、二人を分かつ大きな違いであろうと思う。

3

Vaughan と Wordsworth にとって幼年期とは果たしていかなる意味を持つものであったろうか。

Vaughan の *Silex Scintillans* には、幼年期ないし幼児に対する関心が持続的に一貫して突出

したものとして現われることはない。これは Wordsworth がたえず深い悲しみをこめて、喪失した幼年期をうたい続けたことと対照的である。Vaughan にとって、幼年期とはあくまでも、彼が好んで用いた他のイメージ、光や夜明け、闇、露、天体、植物などと同様、一つのイメージであり、キリスト教思想の枠組の中で天使の無垢、神の恩寵の光に浴していた始源的善の状態を示す vision なのであって、Wordsworth 的な生々しい実体を伴わないものである。もし Vaughan の詩の中で幼年期のイメージが強烈であるとすれば、それは宗教的 vision として強烈なのであって、詩人の個人的経験に由来するものではない。

幼年期の喪失とは過去と現在の時間的持続性の断絶を意味しており、Wordsworth の悲哀の感情はそこから生じている。また、過去の時間からの孤立とは、かつて親和的であった自然や世界からの孤立でもあり、世界そのものからの疎外を意味している。いいかえれば、現在の Wordsworth は外界との内的つながりをもたない状態に生きているのであり、いわば自己喪失の危機的状況にあるのである。であれば、なおさらのこと Wordsworth は、かつて自分が体験した自然の生命と一体となった瞬間を激しく求めるのである。つまり現在の生命の本源的なもののから疎外されている自分をその危機的状況から救い出すために、彼の「時点」(spot of time)と呼ぶ、意味の濃密な瞬間、生命の充実した瞬間を求めるのである。その spot of time という特権的な瞬間の中心にいるのは「かつての少年の自分」であって、Blake におけるような無垢なる魂の状態を象徴する抽象的な子供では決していないのである。Wordsworth にとって、そうした「自分の内なる子供」を記憶によって現在に蘇らせることは、とりもなおさず生命的なものを蘇らせることであり、世界との十全な親和的連関性を回復することなのである。つまり Wordsworth が強迫観念のように幼年期という観念にとりつかれていたことは、彼が外的風景を内面の風景に変質させていったことと同じく、幼年期という過去を現在化することによって、自分の identity を確固たるものにしようという内面の要請に答えていたのである。彼にとって自分の幼年期とは単なる幸福の思い出ではなく、自然の未知なるものと交感していた何か生命的なものの力強いシンボルであったといえよう。

Vaughan と Wordsworth のこうした違いは同じ「虹」というモチーフを扱ったそれぞれの詩によっても端的に知ることができる。Vaughan にとって虹とは、被造物に内在 (immanent) する造物主の姿を読みとる時のよすがとなる自然の聖なる「象形文字」なのであって、決して単なる自然現象ではない。そしてそれを読み解くのが Vaughan の vision の力なのである。

When I behold thee [i.e. the rainbow], though my light be dim,
Distant and low, I can in thine see him,
Who looks upon thee from his glorious throne
And mindes the Covenant 'twixt *All* and *One*.
O foul, deceitful men! my God doth keep
His promise still, but we break ours and sleep.²¹⁾ ("The Rain-bow" ll. 15-20)

Vaughan は虹を見て、そこに神を見、被造物である「全」(*All*)と神である「一」(*One*)との間にかわされた古い「契約」(Covenant)、すなわち、旧約を思いおこす。この *All* と *One* という言い方は、本源的な「一者」(the one)から「万物」(the All)が「流出」という例のネオ・プラトニズムの思想を響かせている言い方である。Donne や Herbert などと比較すれば、Vaughan には、風景を視覚的喜びの対象として裸の眼でとらえていこうとする姿勢が胚胎しかけてはいるが、こういう幻視 (visionary) 的な見方で、自然をネオ・プラトニズム的の寓意

として、あるいは宗教的寓意として見るものが支配的であった時代から完全に自由にはなりきれなかった。

Wordsworth の場合、彼は空にかかった虹を見ながら、同時にかつて虹を見ていた自分、「いのちの始まった時」(When my life began) にいた輝かしい少年の頃の自分をも見ようとする。

My heart leaps up when I behold
A rainbow in the sky:
So was it when my life began;
So is it now I am a man;
So be it when I shall grow old,
Or let me die!
The Child is father of the Man;
And I could wish my days to be
Bound each to each by natural piety.²²⁾

すなわち、Wordsworth にとって虹とは、自然との一体感を成就し、「自然への敬虔な思い」(natural piety) が内からあふれ出た高貴な瞬間、いわば spot of time の一つなのであり、この虹はきわめて原初的な感覚でとらえられた生命力のシンボルであると思う²³⁾。

Henry Vaughan と William Wordsworth。この二人には他にも一見、似かよったところがあるが、本質的には、異質な時代に生きた異質な二人なのである。両者の自然に対する観念や風景に対する姿勢などに関しては、まだ分析する余地はあるのだが、それについては別稿にゆずることにする。

注

- 1) *The Works of Henry Vaughan*, ed. L. C. Martin (Oxford at the Clarendon Press, 1914). p. 520.
- 2) *Wordsworth: Poetical Works*, ed. T. Hutchinson, revised by E. de Selincourt (Oxford University Press, 1988), pp. 460-2.
- 3) 正式の題名は *Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood*.
- 4) *Works*, p. 640.
- 5) このあたりの事情については次の論文参照。L. C. Martin, "Henry Vaughan and the Theme of Infancy", from *Essential Articles: Henry Vaughan*, ed. Alan Rudrum (Archon Books, 1987). pp. 46-59.
- 6) *Works*, p. 419.
- 7) *Coleridge: Poetical Works*, ed. E. H. Coleridge (Oxford University Press, 1988), pp. 153-4.
- 8) *Wordsworth*, p. 164. なお、'being' については *The Prelude* (1805年版) の次の箇所参照
and after I had seen
That spectacle, for many days, my brain
Work'd with a dim and undetermin'd sense
Of unknown modes of being; (BK I. ll. 417-20 イタリアックは筆者)
- 9) 川崎寿彦「ヘンリー・ヴォーンの自然神秘主義」(『形而上詩と瞑想詩』、ピーター・ミルワード 石井正之助監修、荒竹出版) p. 170.
- 10) *Martin*, p. 55.
- 11) *Martin*, p. 52.
- 12) L. C. Martin はこの語句の出典として、1650年代から60年代にかけて、その著作の多くが英訳された Jacob Boehme が考えられるとしている。*Martin*, p. 56.
- 13) *Works*, p. 472.

- 14) *Works*, p. 492.
- 15) J. D. Simmonds, *Masques of God* (University of Pittsburg Press, 1972). p. 48.
- 16) L. L. Martz, *The Poetry of Meditation* (Yale University Press, 1974). pp. 1-4.
- 17) Simmonds, *Loc. cit.*,
- 18) 引用は1805年版による。
- 19) こうした態度は Wordsworth に限らず、他のロマン派の詩人にも見られる。ロマン派の詩人たちには、「人類」という観念が、ファウストに対するメフィストフェレスのように、常につきまとっている。たとえば、次の一節参照。

Scatter, as from an unextinguished hearth
Ashes and sparks, my words among *mankind*!
Be through my lips to unawakened earth

The trumpet of a prophecy!

(P. B. Shelley, *Ode to the West Wind* ll. 66-9 イタリックは筆者)
- 20) *Works*, p. 466.
- 21) *Works*, p. 509.
- 22) *Wordsworth*, p. 62.
- 23) 参考として、中沢新一『虹の理論』（新潮社、1989）。